

財の種類と手に入れた経緯が効用に与える影響について

佐尾彩純^a 岡田恭佳^b 清水瑞記^c 田川拓真^d

要約

本稿は、ものを手に入れた際、さまざまな要因により、その後の効用の変化にどう影響を与えるのかということについて解明することを目的とする研究である。本研究では、ものを手に入れた経緯、ものの種類、および価格、実験参加者の性格という要因とものを手に入れた後の効用の変化との関連性について、「財を手に入れた経緯は効用の時間的变化に影響を与える」「財の種類は効用の時間的变化に影響を与える」という仮説を立てた。これらの仮説を検証するべく、212件の有効回答を下に分散分析、t検定を行った。分析結果として、財の種類、手に入れた経緯は効用の変化に影響を与えることが分かった。しかし、財の価格や実験参加者の性格と効用の変化においては有意な結果が見られなかったため、関連性がな

JEL 分類番号： D91, D12

キーワード： 保有効果, 愛着, 順応

^a 佐尾彩純 同志社大学経済学部 cgeg0659@mail3.doshisha.ac.jp
^b 岡田恭佳 同志社大学経済学部 cgeg0596@mail3.doshisha.ac.jp
^c 清水瑞記 同志社大学経済学部 cgeg0694@mail3.doshisha.ac.jp
^d 田川拓真 同志社大学経済学部 cgeg0754@mail3.doshisha.ac.jp

1. イントロダクション

一般的に、物を購入した後に、我々は順応し、効用は減少していく。筒井義郎(2009)によると「順応効果によって消滅してしまう幸福感を含めた幸福感の変化」が実際に証明されている。対に、自分が所有したものに愛着を持ち、効用が上昇することもある。また、保有効果が働き、自分が所有したものに対して突然価値が上がり、手放したくないと考えることもある。

保有効果を示す実験については、ダニエル・カーネマンがマグカップを用いて、これを示した。この効果は、大橋賢裕(2020)によると「同じ財に対して自分が持っているほうを高く評価してしまうこと」と説明できる。しかし、その効果は一概に同じではなく、財を手に入れた経緯や種類によって異なるのではないのだろうかと私たちは考えた。具体的には、プレゼントでもらったもの、競争などで手に入れたもの、自分で購入したなどの経緯によって効用は異なると考えられる。また、財の種類についても、個人にとって1つあれば十分である代替性が低いもの（財布等）か、2つ以上必要である代替性が高いもの（洋服等）かによって効用の変化の仕方も異なるのではないかと考えた。

そこで私たちは、アンケートを用いて、財の種類ごとに、時間の経過に伴う効用の変化とどのような経緯で手に入れたかをデータを集め、どのような関係があるのか検証していく。また、その他にも価格、性格、価格への評価が与える影響についても検証する。それぞれの詳細については下で記述していく。

2. 仮説

前章でも述べた通り、「財の種類は、効用の時間的变化に影響を与える」と考えられる。これを仮説1とする。同様に「財を手に入れた経緯は、効用の時間的变化に影響を与える」と考えられる。これを仮説2とする。次に、時間が経過した際の効用の差が大きい財、つまり時間が経過した際に得られる効用が高く、価値が上がる財に対して、その価格について妥当である、または安価であると評価すると考えられる。例えば、外食をした際、ある程度の価格がしても満足度が高ければ価格に対して妥当であると判断すると考えられる。そこで、「価格への評価は時間的に変化する効用の差に関連性がある」を仮説3とする。

H1：「財の種類は効用の時間的变化に影響を与える」

H2：「財を手に入れた経緯は、効用の時間的变化に影響を与える」

H3：「価格への評価は時間的に変化する効用の差に関連性がある」

3.1. 調査内容

実験概要としては、2023年9月5日から9月6日の期間中、Google formsを用いたアンケート調査にて計131名(男性48名、女性80名、その他3名)の回答を得た。

アンケートの具体的な質問内容について以下に示す。

質問は全 28 問である。冒頭で性別、年齢を尋ね、前半の 8 問は 1 つ所持していれば十分である財についての質問、後半の 8 問は 2 つ以上必要である財についての質問、最後に実験参加者の性格に関する質問を設けた。方法としては、具体的に 1 つ財を思い浮かべてもらい、その財について以下 5 項目の質問を設けた。

- 1, 手に入れた経緯
- 2, 財の価格
- 3, 価格に対する評価
- 4, 手に入れてからの時間の経過
- 5, 効用の変化

手に入れた経緯は、3 択の選択式で、自分で購入した、景品などで獲得した、貰い物・プレゼントのいずれかを回答してもらう。

価格については記述式、価格に対する評価は、回答してもらった価格に対して高価である、妥当である、安価である、の 3 択の選択式である。

手に入れてからの時間の経過は、1 ヶ月から 3 ヶ月程度、4 ヶ月から 6 ヶ月程度、半年から 1 年程度、1 年以上の 4 択の選択式である。

効用の変化に関しては、手に入れた時点の効用を 0 とし、1 日後と 1 ヶ月後の満足度(手に入れる前は期待度・欲しさ)を-5 から 5 までの数値を選択してもらった。

性格の質問に関しては、以下の 3 項目を測る質問を設けた。

- ①計画的であるか、衝動的であるか
- ②現在志向であるか、未来志向であるか
- ③飽き性であるか、そうでないか

3.2 結果

今回のアンケート結果を分析する上で、1 つ所持していれば十分である代替性の低い財（以降、財 1 とする）と 2 つ以上必要である代替性の高い財（以降、財 2 とする）に分けて考え、それぞれ全て回答されていないものは無効とした。その結果、財 1 群 105 名（うち、自身で購入が 57 名、プレゼントが 48 名）、財 2 群 107 名（うち、自身で購入が 83 名、プレゼントが 24 名）から有効回答を回収した。

特定の物を手に入れた 1 日後から、1 ヶ月後までの効用の変化に何が関係しているのかを調べるため、(1 ヶ月後の効用の値) - (1 日後の効用の値) を「効用の差」とし、分析する上での従属変数とした。また、財の種類、獲得経緯、価格の妥当性、物の価格、回答者の性格（未来志向、計画的、飽き性）を要因とした。

まず、財の種類が効用の差に影響を及ぼしているかどうかを調べるため、財の種類を要因として独立したサンプルの t 検定を行い、等分散性のための Levene の検定の有意確率が 0.155 であるため等分散を仮定しないとして、以下の表 1 のような結果を得た。有意確率は片側 p 値が 0.004、両側 p 値が 0.007 と、共に 0.05 を下回っており有意、つまり財の種類は効用の差に影響を及ぼしていることが分かった。さらに、財 1 の平均値が 0.09、財 2 の平均値が -0.31 であることから、財 1 の効用は上がりやすく、財 2 の効用は下がりやすいことも読み取れる。

| 財の種類別 | | | 独立サンプルの t 検定 | |
|---------|-----|-------|--------------|--------|
| グループ統計量 | | | 有意確率 | |
| | 度数 | 平均値 | 片側 p 値 | 両側 p 値 |
| 財1 | 105 | 0.09 | 0.004 | 0.007 |
| 財2 | 107 | -0.31 | | |

表 1 財の種類別

次に、獲得経緯が効用の差に影響を及ぼしているかどうかを調べるため、財 1 群と財 2 群に分け、獲得経緯を要因として独立したサンプルの t 検定を行い、以下の表 2、3 のような結果を得た。まず、財 1 群の等分散性のための Levene の検定の有意確率が 0.064 であるため等分散を仮定しないとして、有意確率は片側 p 値が 0.044、両側 p 値が 0.088 であり、片側のみ有意であることが分かった。今回の分析では「要因である獲得経緯が従属変数である効用の差に何らかの影響を与える」ことを仮説として考えているため片側 p 値のみ有意である場合、獲得経緯と効用の差の間に何らかの統計的な関連性がある可能性が高いと考えられる。そして、財 2 群の等分散性のための Levene の検定の有意確率が < 0.001 であるため等分散を仮定するとして、有意確率は片側 p 値が 0.031、両側 p 値が 0.061 であり、こちらも片側のみ有意であることが分かった。つまり財 1 と同様に、獲得経緯と効用の差の間に何らかの統計的な関連性がある可能性が高いと考えられる。

| 財 1 の獲得経緯 | | | 独立サンプルの t 検定 | | 財 2 の獲得経緯 | | | 独立サンプルの t 検定 | |
|-----------|----|-------|--------------|--------|-----------|----|-------|--------------|--------|
| グループ統計量 | | | 有意確率 | | グループ統計量 | | | 有意確率 | |
| | 度数 | 平均値 | 片側 p 値 | 両側 p 値 | | 度数 | 平均値 | 片側 p 値 | 両側 p 値 |
| 購入 | 57 | -0.09 | 0.044 | 0.088 | 購入 | 83 | -0.41 | 0.031 | 0.061 |
| プレゼント | 48 | 0.29 | | | プレゼント | 24 | 0.04 | | |

表 3 財 1 の獲得経緯

表 2 財 2 の獲得経緯

更に、価格の妥当性、財の価格、回答者の性格（未来志向、計画的、飽き性）がそれぞれ効用の差に影響を及ぼしているかどうかを調べるため、財1群と財2群に分け、価格の妥当性（安価、妥当、高価の3水準）と財の価格（1~10000円、10001~30000円、30001~、プレゼントの4水準）を1変量分散分析、そして性格である未来志向、計画的、飽き性をそれぞれ独立したサンプルのt検定で分析を行い、以下の表4、5、6のような結果を得た。有意確率はそれぞれ0.05を上回り、有意では無い、つまりどれも効用の差には影響を及ぼしていないということが分かった。

| | タイプIII平方和 | 自由度 | 平均平方 | F値 | 有意確率 | 偏イータ2乗 |
|----|-----------|-----|-------|-------|-------|--------|
| 財1 | 0.019 | 2 | 0.01 | 0.008 | 0.992 | 0 |
| 財2 | 4.85 | 2 | 2.425 | 2.293 | 0.106 | 0.042 |

表4 価格妥当性

| | タイプIII平方和 | 自由度 | 平均平方 | F値 | 有意確率 | 偏イータ2乗 |
|----|-----------|-----|-------|-------|-------|--------|
| 財1 | 5.075 | 3 | 1.692 | 1.51 | 0.217 | 0.043 |
| 財2 | 6.133 | 3 | 2.044 | 1.937 | 0.128 | 0.053 |

表5 財の価格

| 財1 | 度数 | 平均値 | 財2 | 度数 | 平均値 |
|--------|----|------|--------|----|-------|
| 未来志向 | 52 | 0.08 | 未来志向 | 54 | -0.28 |
| 現在志向 | 53 | 0.09 | 現在志向 | 53 | -0.34 |
| 計画的 | 55 | 0.15 | 計画的 | 55 | -0.36 |
| 衝動的 | 50 | 0.02 | 衝動的 | 52 | -0.25 |
| 飽き性 | 69 | 0.12 | 飽き性 | 73 | -0.4 |
| 飽き性でない | 36 | 0.03 | 飽き性でない | 34 | -0.12 |

| 財1 | 等分散性のためのLeveneの検定 | | 独立サンプルのt検定 有意確率 | |
|------|-------------------|--|-----------------|-------|
| | 有意確率 | | 片側p値 | 両側p値 |
| 未来志向 | 0.993→等分散を仮定しない | | 0.467 | 0.934 |
| 計画的 | 0.124→等分散を仮定しない | | 0.27 | 0.54 |
| 飽き性 | 0.858→等分散を仮定しない | | 0.325 | 0.649 |
| 財2 | 等分散性のためのLeveneの検定 | | 独立サンプルのt検定 有意確率 | |
| | 有意確率 | | 片側p値 | 両側p値 |
| 未来志向 | 0.74→等分散を仮定しない | | 0.38 | 0.76 |
| 計画的 | 0.425→等分散を仮定しない | | 0.287 | 0.573 |
| 飽き性 | 0.042→等分散を仮定する | | 0.099 | 0.197 |

表6 性格

3.3. 考察

今回の調査の結果から、財の種類と獲得経緯が効用の差に影響を及ぼすことが分かった。財の種類において、財1の効用は上がりやすく、財2の効用は下がりやすい。つまり、1つ所持していれば十分である財はそのものの使用頻度が高いことや、個人にとって希少であること、代替品がないことによって愛着が湧きやすく、2つ以上必要である財は、使用頻度が低いこと、個人にとって希少でないこと、代替品があることによって愛着が湧きにくいのではないかと考える。一般的に「財の陳腐化」という現象は、使用頻度や接触頻度、露出頻度が高いことによって生じる現象であるが、個人の所有物に関しては使用頻度が低い状況でも観察される可能性が示された。獲得経緯においては、財1と財2共に片側p値のみ有意であることから、獲得経緯と効用の時間的差の間にある関係を特定化するまでには至らなかった。

4. 研究の限界と展望

本研究の限界として、以下4点を提示する。1点目は実験参加者の偏りである。参加者の多くが20代であり、結果に影響を及ぼした可能性が考えられる。2点目は、財について想像してもらう際に、回答者が自身の愛着が強い財を想像する傾向にあるので、効用が著しく下がる回答が少なかった。3点目は、財の種類について、1つあれば十分であるものか、2つ以上必要であるものは、人によって若干の認識の乖離があるかもしれないということだ。もしかすると、人によっては、前者の財でも1つでは十分であるとは感じない回答者もいるかもしれない。4点目は、経緯についてだ。アンケートでは、「プレゼント」と「自分で購入した」という2点の解答しか取ることができなかった。これに関しても、もう一つの選択肢である「景品などで獲得した」財に関しては異なる見解が得られるのではないかと考える。

次に今後の展望について述べる。今回の実験においては、財の種類を二つに絞ったが、より細く財の種類を分けてさらに細かく検証していきたい。

引用文献

筒井義郎, 2009. 幸福の経済学は福音をもたらすか?. 行動経済学 2巻, 1-15

大橋賢裕, 2020. 保有効果を測るアンケート実験について. 経済集志 第90巻, 167-178